

ユビキタスネットワーク 技術開発プロジェクト

小特集編集にあたって

編集チームリーダー 田上敦士

「ユビキタス」という言葉を初めて耳にしたとき、この音に何となく座りの悪さを感じたものであった。それが、ここ数年で、新聞やテレビ・雑誌でよく見聞きする言葉となった。その広まりとともに、当初の「ユビキタスコンピューティング」だけでなく、ユビキタスは様々な文脈で使われるようになった。その中でも「いつでも、どこでも、何でも、だれでも」ネットワークにつながる「ユビキタスネットワーク」は、広く使われている言葉の一つであろう。その背景には携帯電話等、ある意味「ユビキタス端末」と呼べるものが広く普及していること、今後もその傾向は続くと思われていることがあると思われる。

「ユビキタス」という言葉がまだ耳慣れなかった5年前に開始された総務省ユビキタスネットワーク技術の研究開発プロジェクトは、「ユビキタスネットワーク」の普及の一端を担ってきた。本小特集では、昨年度で終了し、一つの区切りを迎えた3プロジェクトにその活動内容に関して報告して頂くこととした。これらのプロジェクトでは研究開発だけでなく、その技術を応用しての実証試験を行ってきた。そのため、未来のユビキタスネットワーク社会をイメージする手助けになると思われる。

まず、総務省の田原様にユビキタスネットワーク技術の研究開発を行っている背景や政策的位置付け、国際動

向、国の研究開発施策の概要と普及展開に向けた取組みを概論して頂く。

次にユビキタス制御・管理技術プロジェクト（愛称：Ubila プロジェクト）の大橋様ほかに、ユーザに最もふさわしいサービスを提供するための、ネットワーク技術からユーザのアプリケーション全体にわたる制御・管理技術の研究開発と、実証実験スペース構築や将来イメージビデオ作成などの活動に関して紹介して頂く。

次にユビキタスネットワーク認証・エージェント技術プロジェクト（略称：UAA プロジェクト）の清野様ほかに、安心性を実現するユビキタスネットワーク認証技術と、利便性・柔軟性を実現するエージェント系技術の研究開発と、様々なフィールドでの実証実験に関して紹介して頂く。

最後に超小型チップネットワークプロジェクトの小林様ほかに、ユビキタスネットワークを実現するためのキーデバイスの一つであるアクティブRFID技術の研究開発と、その適用例に関して紹介して頂く。

「ユビキタスコンピューティング」という言葉を最初に提唱したMark Weiser氏は「環境に溶け込み見えなくなる」というビジョンを表す言葉として「ユビキタス」を用いたといわれている。本プロジェクトの成果が更に発展し、環境に溶け込んだネットワークが実現されることに期待したい。

最後に、大変お忙しい中、有益な原稿を執筆して頂いた執筆者の皆様にご心から感謝致します。